

日本の大学における朝鮮語教育に関する一考察

— 「導入始期」の指導指標を中心に —

麗澤大学 朴 勇 俊

I. 大学における朝鮮語教育の当面問題

日本の大学において本格的な朝鮮語学部が設置されたのは、1925年（大正14年）天理大学の前身である天理外国語学校が唯一のものであった。戦後は、18年を過ぎた1963年に大阪外国語大学、そしてその14年後の1977年には東京外国語大学に、それぞれ朝鮮語学科が設けられるにいたった。しかし1970年代末には、日本全国で朝鮮語科目の講義を設けた大学は、国公私立を通じて22大学となっているとの調査報告がある。⁽¹⁾ 外国語学部、文学部、商学部、経済学部、社会学部、国際関係学部などの学部で設置される場合が多いという。

最近の調査結果が得られないのではっきりした数は未詳であるが、筆者の各大学への問い合わせや大学案内の総覧などからすると、現時点では日本国内の約100に近い大学で朝鮮語科目の講義が設けられているものと推察される。各大学で現在進行中の学部改編などでも、「国際化志向」の高まりを反映し「朝鮮語科目」を新設する場合が少なくない。今後ともこの傾向は続くものと考えられる。

大学での朝鮮語科目設置・導入に関しては、大きく二つの問題が考察の対象として考えられる。その一つは、これらの大学で朝鮮語科目がどのような契機によって設置されるにいたり、大学のカリキュラムにどのように位置づいているかという問題であり、その二つは、大学での朝鮮語科目の指導はどのようになされるべきかの問題である。前者は大学の教育理念や教育方針の特質や方向性にかかわる問題で、たとえば朝鮮語科目の名称を「朝鮮語」とするか「韓国語」とするか、あるいは「コリア語」とするか意思決定などがこれにあたる。また朝鮮語科目の設置といっても専攻課程としての学科設置にいたる場合は見られず、教養選択などの選択科目として導入される場合がほとんどである。このような大学のカリキュラムでの位置づけを含め朝鮮語導入の諸分節にかかわる大学の対応は、大学の国際性・学問観・教育観を測る契機となろう。また、このような問題に関する探求は、大学教育に関する教育経営学的考察の重要な課題といえよう。

後者は、大学における朝鮮語教育を支える指導理論の形成と朝鮮語教育技術開発の問題である。近来、社会一般における朝鮮語学習ブームに伴い数多くの朝鮮語学習書や教本、辞書などが刊行されているが、それらの基盤をなすべき朝鮮語指導理論や実践理論は皆無に等しい。とくに大学における朝鮮語教育理論の開発に関する研究は、不毛といわざるを得ない。このような事情は、朝鮮語教育論が語学論に傾斜し教育学や心理学の成果の受容による教育論形成が未だ不十分である事もその一因であるといえる。この問題は稿を別にして論じてみたいと思うが、この問題は日本の大学における朝鮮語教育の当面課題として早急な取り組みが求められる。

II. 本研究の意義と指標

A. 本研究の指標と先行研究事項

本研究は、上にあげた2つの課題のうち、後者にかかわる朝鮮語教育論の開発に關しての実践体験による考察である。具体的には、大学での「朝鮮語初級」課程学習者を対象に、入門期の初期である「導入始期」における朝鮮語指導指標を設定し、その指標にかかわる分野での既存の実践事例をとりあげた朝鮮語学習「導入始期」指導プラン作成の準拠を得ようとするものである。この入門期指導における初期段階である「導入始期」の指導にあたって、筆者は次のような指標を設定、実施する。

1. 教授者の指導を最小限に絞り、学習者の自己学習を主とする形態で学習効率が高まるような「教授－学習」過程をデザインする。
2. そのような「教授－学習」過程は、「ティーチャー・フリー (teacher free) －設定、記述された教授プランや指導細則を忠実に実施さえすれば、教授者の能力に關係なく所期の成果が得られる－という特性を有する」ように留意する。
3. 日本語を母語とする日本人の言語特性が何であり、朝鮮語学習にあたって考えられる「促進」要件や「干渉」要件が何かを勘案した教材を作成、活用する。
4. 大学における「アクション・リサーチ」⁽²⁾を推進するとの見地から、一般に適用できる「実践典型」の追求に留意する。

なお、この研究課題は、この間筆者が2、3の大学において朝鮮語科目の講義を担当した体験をもとにすでに発表した研究の延長線上に位置づくものである。その一つは「日本人の朝鮮語学習における入門期指導について（朝鮮語教育研究、創刊号1987年）」（論文A）である。この論文は、朝鮮語指導の入門期の指導要領を提示し、教授過程の概要を段階別に例示したもので⁽³⁾、大学における朝鮮語科目指導での入門期指導の典型的過程を論述したものである。

ついでに論稿は、「日本人の朝鮮語学習における＜促進＞及び＜干渉＞について（朝鮮語教育研究、第3号、1989年3月）」（論文B）である。朝鮮語を新たに学習するにあたって母国語である日本語によって培われた言語感覚が有利に作用する場合を「促進 (facilitation)」、不利に作用する場合を「干渉(interference)」と規定し、「干渉」となる要件3事項、「促進」となる要件4事項を集約・提示したものである。⁽⁴⁾

これら2つの筆者による先行研究が、本稿の支柱となる点をここで確認しておきたい。まず第一に、（論文A）において入門期指導の諸分節と指導の過程を具体的に記述したが、その過程の記述を通じて本稿の考察対象としている指導過程の一つとしての「導入始期」の位置づけを明確に規定・区分する土台が確保されたものといえる。⁽⁵⁾

第二に、（論文A）では朝鮮語の音韻体系の全容を音素の特質に沿って分類・提示し、それに対応する日本語音を列挙し、日本語音韻の特性から朝鮮語音発音の典型的誤謬事例を示していることから、発音指導の重点を想定でき、指導プラン作成の有力な参考資料とし得る。⁽⁶⁾

第三に、(論文A)においてテキスト作成の留意点や方法、手続等が明示されており、指導案の作成を行うことができた。⁽¹⁾

第四に、(論文B)において特に母音の発音における「干渉」の事例9、子音の事例14等が集約・明示されており、重点的な指導事項を抽出・設定する準拠を得ることができた。

第五に、(論文B)において日本人の韓国語学習者にとって漢字語彙の多くが発音も類似し、意味内容も同一のものがあ、それらは「促進」要件となるが、それらの典型的範例が提示されており、テキスト作成の参考となり得る。

B. 入門期指導の概要

以上は筆者による朝鮮語の入門期指導に関する先行研究として、本稿の前提となる考察事項を集約したものである。ちなみに朝鮮語の入門期指導は、上記の(論文A)であげられたように1週2時限(1時限90分)の講義で8週分16時限が想定される。以下では、入門期指導の教授過程としての特性を明らかにし、特に「導入始期」という、本稿で考察を試みる部分の区分と位置づけを確かめることにする。まず入門期指導について先にあげた二つの論文での提示を踏まえ、その概念と過程を明らかにしてみよう。

朝鮮語の入門期指導とは、学習者が朝鮮語学習によって得られる自己の可能性開発の展望に立って朝鮮語学習に対する積極的誘意性を高め、朝鮮語の自己学習が可能なレベルにいたる、朝鮮語習得の基盤となる必須の基礎・基本事項の体系的、計画的指導を意味する。朝鮮語の音韻、文字、語彙のしくみと意味、語法、文章等に関する総体的感覚の原型を感得させることが、その土台となる。この場合の朝鮮語学習による可能性開発の展望とは、第一に外国語としての朝鮮語学習が学習者自身の自己実現にどのようにかかわってくるかの主体的自覚と確信をうちたてることに資する指導の場を用意すべきことを意味する。ただ何となく朝鮮語科目を選択・受講するのではなく、今後の自己成長や生涯設計に連なる学習課業として取り組めるよう、科目選択にあたっての指導の機会および科目履修に際しての学業ガイダンスが供与されるべきことを示すものである。

第二に、朝鮮語の言語体系は、日本語と語順、文章構造、漢字語などで共通点が多く、他の外国語よりも学びやすいという特徴を持ち、学習の進展度も高くなる可能性が考えられる。これらの語学学習上の有利な点を最大限に生かした入門期指導の体系が考えられるべきことが示唆される。それゆえ「入門期指導」において何を必ず教えるべきかという基礎・基本としての学習事項の精選と体系化、教材化が重要な課題である。

第三に、朝鮮語学習に対する積極的誘意性を高め、朝鮮語の自己学習が可能なレベルにいたる指導というのは、具体的には入門期指導の時点において、他の外国語に比して最小限の指導と最大限の個別自己学習が可能な「朝鮮語教材」の開発と活用を意味する。それゆえ朝鮮語学習においては、音韻分野の基礎・基本に習熟するにつれ、「自己学習」の間口が大幅に広がり奥行きがいつそう深くなる可能性がある。文法や語彙や品詞の変化が他の外国語に比して比較的なじみやすい点を十分に生かした効果的な「個別自己学習教材」の開発によって、授業の効率化を考えて

いくことも「入門期指導」の当面課題である。

第四に、外国語指導においては当然のことであるが、朝鮮語の音韻・文字・語彙のしくみと意味、語法、文章等に関する「総体的感覚」の原型を感得させることに留意すべきことである。ここでいう「総体的感覚」とは、ある言語表現の文脈的均衡感や音韻的特性表現の的確性などを、直観的に洞察・認識する心意作用を意味する。朝鮮語の場合で言えば、朝鮮語を朝鮮語として感じ取る言語的センスであり、朝鮮語という言語システムの特徴を構造的なゲシュタルトとして総体的に感知する能力である。

このような「総体的感覚」は、ある学習者がある言語を習得する全学習歴を通じて開発・育成・強化されるものであることは言うまでもない。ただ、「入門期指導」においては、入門期なりに開発・習得させるべきレベルと深度を確かめ、その開発と形成への着目と指導をおろそかにしてはならない。すなわち、そのような「総体的感覚」を形成するために必要な指導事項は何か、それはどのようなプロセスと技法で指導されるべきか、ということに深く留意されねばならないのである。

以上は、大学の朝鮮語教育実践における「入門期指導」において筆者が特に強調したい当面指標であるが、以下の「導入始期」の考察においては、指導プランの構想としてこれらの指標を展開してみたい。

C. 「導入始期」の意義と機能

1. 「導入始期」の位置づけ

本研究の対象である「導入始期」は文字通り上述した朝鮮語の入門期指導における最初の指導段階を想定・指称するものである。先にあげた（論文A）では、「入門期指導」の過程を3段階に分け、「導入指導」「基礎指導」「自己学習指導」と規定した。本研究では基本的にはこのような指導段階論を踏まえ、「導入指導」の段階を「導入始期」と指称する。なお、「入門指導期」8週間16時限の内、この「導入始期」には3週間6時限ほどの時間枠が必要と考えられる。

この「導入始期」の展開について、基本的には朝鮮語にはじめて接する朝鮮語学習者を対象にどのような指導目標を設け、どのような指導過程に沿って、どのような指導技法を適用するかについての論議は、きわめて重要な問題である。「導入始期」の指導をどのようにとらえるか、どのような指導プランを選択し、指導目標の重点や評価の目安をどこに据えるか等の問題は、当面する実践課題であるとともに朝鮮語教育論形成の基本的課題でもある。

2. 朝鮮語学習過程「導入始期」の教育的実践

朝鮮語入門期指導の指導指標として、前掲の（論文A）は、

- a. 朝鮮語と日本語との共通点・類似点を示し、学習の容易さと有用性を理解させ、積極的に学習へ取り組むよう導く。
- b. 朝鮮の典型的文化や生活などを紹介しながら、それにかかわる会話や学習内容を精選、組織化することで学習内容に臨場感を持たせる。

- c. 言語だけでなく、絵・写真・スライド等を提示し、学習場面の雰囲気や情感を感得させる。
 - d. 基本文型、基本単語、基本会話などを「基本指導系列」と「個別指導系列」に分析・体系化し、一斉指導および個別指導に活用する。
 - e. 教材は自学自習が可能になるように作成し、短時間の個別机間指導を基本に毎時間の指導を進める。
- などをあげている。⁽⁵⁾

「導入始期」は「入門期指導」の入口の段階であるため、このような「入門期指導」の指標はそのまま「導入始期」指標の共有地盤となる。この指導指標と同論文の「朝鮮語入門期指導の意味」に示されている5項目の学習到達点をつきあわせることで、「導入始期」の教育的機能と教育内容の概要を推量する契機を得ることができよう。

朝鮮語の入門期指導における「学習到達点」は、

- a. 朝鮮語の文字表記と音韻の理解およびある程度の表記が可能となる。
- b. 初歩的文章を辞書等を使用しながら読むことができる。
- c. 初歩的会話で自己表現できる。
- d. ある程度のまとまった「言語感覚」を感じ取ることができる。

等である。

入門期指導段階全般にわたる上記の朝鮮語教育内容と指導の指標が示唆する「導入始期」の指導の着眼点は、次のように考えることができる。

3. 「導入始期」の指導の着眼点

- a. 外国語としての朝鮮語の由来と日本語との類似性、その学習の容易さと可能性、学習者の学習・研究分野との連関などの観点から朝鮮語学習への積極的な誘意性を高める。

朝鮮語は、日本の大学において主として第2外国語やそれに準ずる外国語として位置づいている。欧米の英、仏、独、スペイン語、アジアの中国語などに比べると、受講生も少なく、マイナーな実情にある。しかし、大学院レベルの民俗学、経済学、言語学、歴史学等、とくにアジア関連の人文・社会諸科学の専攻者間では朝鮮語学習が相当ひろまっている。学部レベルの学生にも、卒業論文等で韓国・朝鮮関係問題を手がけるための朝鮮語学習を志す者がみられる。このように学習・研究のテーマや対象が韓国・朝鮮にかかわる場合、学習者の朝鮮語教育への積極的な取り組みや誘意性の高まりが見られることになる。大学全般における韓国学研究のひろまりや韓国・朝鮮への調査や研究の関心が徐々に高まって来つつあるので、朝鮮語受講の需要も今後いっそう高まるのではないかと思われるが、とくに「導入始期」の指導においては、このような学生自身の学習・研究につながる誘意性の掘り起こしと定着に心を砕くべきであろう。

- b. 朝鮮語学習を通じて、異文化としての韓国・朝鮮文化理解を深めるよう留意する。

外国語学習という場合、学習すべき言語は単なる無機的な意思疎通の記号体系に終わるものではない。ある民族や国の言語は、長い年月を通してその種族や民族が生存と繁栄をめざし、自然

界や他社会にかかわる様々な障害条件や葛藤を乗り越えてきた軌跡の中で、生まれ、育まれ、しごかれ、そして磨き上げられてきた社会の命綱といえるものである。また種族や民族や国民のアイデンティティを映し出してくれる生きた鏡であり、知恵の宝庫でもある。

外国語にはじめて接し、学ぶにあたっての心構えとしては、人類の貴重な資産としての異文化に接し、その扉をたたくという敬虔な気持ちと異国の友人との気軽な交流の媒介の手だてを学びとる姿勢を併せもつべきである。朝鮮語の場合、特に「敬語」や「謙讓語」体系に見る儒教的礼法の秩序や、こまやかな「擬音表現」に見る自然観の緻密さなど、言語に組み込まれた独特の伝統的文化がうかがえる。

c. 「ハングル」(朝鮮文字)の音韻、文字体系の確実・迅速な理解・習得によって多様な文章の読解・修練に力を注ぐ。

大学における朝鮮語学習の「導入始期」において、「ハングル」の解説指導は重要な意義を持つ。学習者である大学生が習得すべき外国語の表記体系を知悉し、たとえ意味内容は把握できなくても、表記された語彙や文章を読みこなすことができるというのは、学習成果を勝ち得たことの充足感というまでもなく、次の学習に対する強力な動機づけになり得る。とくに朝鮮語の場合は、字母の組み立てとそれによって成立する発音が字母の音価の連結にはほぼ対応し、発音法則の例外が少なく、それほど変化がないので、適切な指導があれば初学者でも1、2時限の指導で文章の音読はある程度マスターし得る。語順や助詞、接続詞等の位置や機能が日本語の構文と似ているので、辞書を活用し語意を確かめれば、他のどの外国語よりも速やかな自学自習による読解力の進展が可能となる。

なお、本稿では後に短時間で可能なハングルの解説指導事例をとりあげ、そのモデルを提示する。

d. 日常生活で使用頻度の高い簡単な会話を徹底的に暗誦・習熟・活用する体験を十分に与える。

会話は、語意の連結による独特の文章からなるが、実際の対話に活用されるためには、徹底した習熟・定着が必要となる。また一つ一つの発話単位は、一つの単語のように統合化、縮約化され、ある状況に対応して反射的に発せられなければならない。このような「会話」指導には、その基礎となる対話場面の選択と対話文の精選、学習者による「暗誦」、「練習」、「定着」が必要となる。大学における朝鮮語講義では、このような会話の臨場的指導を毎時間、短時間なりとも行って効果を確かめるべきである。

e. 朝鮮語の「総合的感覚」の修練を講義の中で総合的あるいは特定の時間をとって行うよう留意する。

正しい朝鮮語、美しい朝鮮語をそれとして感じとり、不自然な表現、誤った語法等を視聴覚を問わず、的確に感得・摘出し得る能力の土台は、朝鮮語の「総合的感覚」によるものといえる。このような「総合的感覚」とは、ある言語システムの本質的特性を母感覚として総合的に直観的

に感得・認識していて、その分野の言語現象に対応し、その均衡感、的確性、あるいは不自然さやずれ等を感じとる心意機能である。このようなゲシュタルト的な言語的感性といえる「総体的感覚」の開発・伸張指導は、外国語教育において意図的、体系的に論議・研究されたことはあまりないと思われる。しかし、これからの外国語教育においては、是非とも取り上げられ、論議・研究されるべきであると思う。このような「総体的感覚」の開発・育成のためには、正しく美しい朝鮮語の模範例文の反復朗読、暗誦、聞き取りによる感覚発表、不自然かつ間違った表現の修正、訂正の学習等を地道に継続して行うことが必要であると思う。

Ⅲ. 「導入始期」における朝鮮語指導の実際

前節では朝鮮語の入門期指導の初期にあたる「導入始期」における指導の着眼点を提示した。本章ではそれら指導の着眼点に沿うような効果のあった実践事例（関東地方の2大学での朝鮮語講義の実践）⁽⁹⁾を、以下のように総括・整理し、提示することにする。

A. 朝鮮語学習への積極的な誘意性を高める実践

1. 「ハングル」創製の経緯と字母の形状が示すもの

象形文字としての漢字やデザイン的に優雅なアルファベットを見慣れてきた日本人にとって「ハングル」の字母は、文字というにはあまりにも単調に過ぎるように思われ、「何か記号のような・・・」という印象を持つようである。朝鮮語学習者にとっても、字形が単純かつ無機的なことから他の外国語学習に比べ気が引けるのかも知れない。要するに学習に対する誇らしさがそれほど感じられず、朝鮮語学習への誘意性や熱意が今一つ弱い場合、次のような「ハングル」の創製や形状に関する説明は、朝鮮語学習の閉塞感や引け目を払拭するよい契機となるかも知れない。

a. 説明の概要

(1) 「ハングル」創製の経緯

「ハングル」は、1443年、近世朝鮮4代王世宗大王と直属のアカデミーである「集賢殿」学士らの協力によって完成され、1446年10月、その用例手引きである「訓民正音解例」とともに頒布されるにいたった。

その序文には、「国之語音 異乎中国 与文字不相流通 故愚民有所言 而終不得伸其情者多矣 予為此憫然 新製二十八字 欲使人人易習便於 日用矣」とあるが、その意味は「わが国で用いられている漢字は朝鮮社会の言葉をそのまま表記するのは不可能なので漢字を学んでいない民衆一般が表現したい意見があっても結局表明できないままで終わる場合が多い。予はこれをあわれみ新しく28個の文字を制定して下々にいたる人々が皆、容易に学ぶことができ、日々自由に活用することができるようにと望んだしだいである。」まさに一般民衆のための文字をとという衷情あふれる民主的意図に支えられて誕生した文字といえる。この文字の名称を「訓民正音」としたのも、一般民衆を大事に思う思想の表れと解せる。

また、この「訓民正音」は当時の音韻学の最高水準の成果を踏まえた文字体系で、序文には

「雖風声鶴涙 鶏鳴狗吠 皆可得而書矣（風の音、鶴や鶏の鳴き声、そして犬の吠える声など、あらゆる音を書き表せる）」とされ、世宗実録には「凡文字及本国俚語皆可得而書 字雖簡要 轉換無窮（漢字の音はいうまでもなく国の言葉をすべて書き表せる。文字は少なく簡単だが、自由自在な組み合わせで活用の方途はかぎらない）」とされ、科学的で合理的でありながら、文字としての機能も卓越している、ということができる。

（2）形状の由縁

ハンゲルの形状の由縁であるが、すべて子音の字形はそれを発音する際の発音器官である舌、歯、喉、唇の発動形態を表示しているとされる。先にあげた「訓民正音解例」の「制字解」には、「牙音 ㄱ 象舌根閉喉之形（牙音のㄱは舌の根が喉をふさぐ形をかたどったものである）」「舌音 ㄴ 象舌附上顎之形（舌音のㄴは舌が上顎に付いた形である）」「唇音 ㄹ 象口形（唇音のㄹは口の形をかたどったものである）」「歯音 ㄷ 象歯形（歯音のㄷは歯の形をかたどったものである）」とある。

以上は子音（初声）のばあいであるが、母音（中声）は「天」をかたどった「· (a)」、「地」をかたどった「ㅡ (u)」、「人」をかたどった「ㅣ (i)」の3基本音素を示す文字と、この3音素が交合して「ㅏ (ea)」、「ㅑ (ja)」、「ㅓ (o)」、「ㅕ (jo)」、「ㅗ (o)」、「ㅛ (jo)」、「ㅜ (u)」、「ㅠ (ju)」の8母音が形成される。（以上は「朝鮮語初級」科目、最初の時間90分の内約35分間の説明要旨である。）

2. 朝鮮語および文字「ハンゲル」の学びやすさ

a. 朝鮮語の学びやすさ

- （1）構文の語順が日本語と共通している。
- （2）文章の種類が異なっても語順の差がなく叙述語の語尾の差で意味を変える。
- （3）時制の区別がそれほど明らかでなく補助語幹の活用で区分される。

b. 「ハンゲル」の学びやすさ

- （1）字体と字画数が簡単、単純でおぼえやすい。
- （2）韓国語の文字は一音節単位が一つの文字単位を形成するように用いられている。したがって表意文字でありながら表意化につながる理解しやすい文字である。
- （3）字母24のそれぞれの音素の組み合わせで成り立つ音節およびその連結文の読み方は、変則性が少なく読みやすい。（以上、約20分間）

c. 検討

以上のような「ハンゲル」の創製過程と文字の形状、音韻および朝鮮語の学びやすさについての説明は、朝鮮語入門指導の「導入始期」に行われるべき必須の学習事項である。筆者が担当する「朝鮮語初級」科目の最初の講義の受講者の反応の大勢を示したのが、次のような意見である。

「簡単なように思ったハンゲルの奥の深さに驚いた」、「ハンゲル創製の経緯を知り感

動した」、「朝鮮語がおもしろそうである。勉強してみたいと思う。」等であった。

B. 朝鮮語学習を通じた韓国文化の理解

1. 「待遇関係」を示す語彙（謙讓語、敬語）

家族や社会の中での対人関係の韓国的典型が日常生活の言葉の用法に反映されており、それが「待遇関係」を示す「階称区分」である。呼称、終止形語尾等が多い。しかし、現在では日本より「階称区分」がはっきり残存・維持されている傾向がある。

「階称区分」とは、人間関係において対象の「尊・卑」の程度を区分し、呼称あるいは他の語彙の用法を対置した枠組みをいう。大まかに「卑称」「普通卑称」「平称」「尊称」「極尊称」「半語」等に分けられるが、身分・年齢・家族・縁戚間の序列によって判断・対応していくことになる。古来からの社会・家族制度の特性や伝統からして多様なものがある。この問題をそのまま紹介・説明するのは、「導入始期」では無理なので、階称区分の多様さ・複雑さを下記の1人称、2人称の代名詞を例にあげた表を示し、その大まかな概念だけを紹介しておこう。何人かの学生から質問があったが、社会学を専攻する3年生がとくに関心を示し質問してきた。日韓の家族制度との比較研究を手がけたいとのことであった。

表1. 2人称および1人称の階称区分

階称	卑称	普通卑称	半語	平称	尊称	極尊称
相手	너 (お前)	자네 (君)	당신 (あなた) 거기 (そちら) 자네 (君)	당신 (あなた) 거기 (そちら) 덕 (おたく)	선생님 (先生) 당신 (あなた様) 어른, 덕 (お宅様)	선생님 (先生) 어르신님 (御前様)
自分	나 (私)	나 (私)	나 (私)	나 (私)	저 (小生)	저, 저희 (小生)

表Iの「階称区分」は、そのまま長幼の序列など韓国社会の日常化された儒教的な「礼制」の形を変えた表現といえる。尊称・極尊称の場合、日本で一般に用いられている用語では区分が難しいので、和訳は大まかにあてておいた。長上の前では喫煙は一切許されないこと、飲酒の際には体を横によじって盃を持つ手を後ろ向きにしつつ飲むことなど、韓国社会の場合、「長幼の序」は「階称区分」とともに根強く残存している。言語とそれを生む土壌である社会の実像を複眼的に考察する視点を示唆することは、文化としての言語を学習するにあたって留意すべきことであろう。

C. ハングル学習の効率化

1. ハングル習得の速成方式

前述した「訓民正音」前文に「欲使人人易習」とあるように、「ハングル」には本来「誰もが習いやすくしたい」との思いがこめられているようである。「ハングル」の字形や表音体系を分析してみると、すみずみに「習いやすく」との苦心が染み込んでいる。「ハングル」のたやすい習得のこつは、そのような意図と配慮の経過を辿り探っていけばよいわけである。教え方が適切であれば90分時限の2回ほどで、ハンゲルの習得・定着と音読が可能となるはずである。

そのような意図と配慮のなかで、大学の授業において「ハングル」の効果的な習得指導に活用できる点を、次に取り上げてみることにしよう。

- a. 母音の字形が陽性・陰性など、音素の性質を体感的にシンボライズし、簡単な直線や点の組み合わせで的確に視覚化していること。
- b. 子音の字形が人体の発声器官の発動態様を図化していること。
- c. 朝鮮語のすべての音声はハンゲルの4つの音節類型で表示できる。

以上の諸点を勘案したハングル習得の速成方式指導の一例を、次に示そう。

a. 字形と音素の連結によるイメージ作りと記銘

なじみの薄い外国語の場合の字形と、それが示す音価を早急に統合・記憶・記銘することが求められる。上の諸点を勘案したハングル習得の速成方式として、次のような説明と方法が有効である。

- (1) 「ㅏ」の場合、「大地の上に立った人間が太陽に向かって（陽性母音）オーと叫ぶ。[o]である。ノートに書きながらオーと発音してみよう。」
- (2) 「ㅑ」の場合、人が明るい気持ち（陽性母音）で右手をあげ握手を求めた。あくしゅの[a]である。「ㅣ」はいの一番の[i]である。
- (3) 「ㅓ」は暗い地下（陰性母音）深く潜る[u]である。「ㅡ」は歯を一の字に食し、べり唇をひきしめた[w]である。
- (4) 「ㅗ」は唇を閉ざしてびしっとひきしめ鼻で出す音[m]である。
- (5) 「ㅛ」は閉ざした唇からやおろ息を漏らす音[p]である。というように字形と音価の相関をイメージ化させる導入を行う。

2. 音節や発音類別による段階的的文字指導

ハンゲルの文字習得学習の最短経路を段階として集約すると、次ページの表2のような4つの類型に集約される。第1類型は子音+母音のみ、第2類型は子音+母音、複母音、第3類型は濃音表示の字形、第4類型は子音+母音+子音でこの段階にそって典型的な語彙の読みを通じて学習させていくと習得が速い。ハンゲルの字母（子音・母音）の音価一覧表を照合しながら次の語彙群を読みとり習得していくと、自然にすべての文章を読みとることができるようになる。

表2. ハングル習得学習の最短経路¹⁰⁾

a. 第1類型 (初声+中声のみの字型)			
(1) 어머니 (母)	아버지 (父)	조카 (甥)	
[amɔni]	[abɔdʒi]	[tʃokʰa]	
(2) 나라 (国)	라디오 (ラジオ)	교수 (教授)	
[nara]	[radio]	[kjosu]	
(3) 처자 (からしな)	규수 (閔秀)	요리 (料理)	
[kʲɔdʒa]	[kʲusu]	[jori]	
(4) 묘기 (妙技)	마차 (馬車)	퍼지다 (広がる)	
[mjogi]	[matʰa]	[phɔdʒida]	
(5) 효자 (孝子)	토지 (土地)	차고 (車庫)	
[hʲɔdʒa]	[thɔdʒi]	[tʰago]	
(6) 벼루 (硯)	비서 (秘書)	키 (身長)	
[pjɔru]	[piso]	[kʰi]	
(7) 타자 (打者)	표시 (表示)	혀 (舌)	
[thadʒa]	[phjoʃi]	[hjo]	
b. 第2類型 (初声+中声 (複母音) の字型)			
(8) 과자 (お菓子)	개시 (開始)	새시대 (新時代)	
[kwadʒa]	[keʃi]	[seʃide]	
(9) 제사 (祭祀)	매주 (みそのこうじ)	예의 (礼儀)	
[tʃesa]	[medʒu]	[jeui]	
(10) 애기 (赤ちゃん)	되다 (～になる)	쇠고기 (牛肉)	
[egi]	[tweda]	[swegogi]	
(11) 궤도 (軌道)	왜지 (ふた)	쥐요 (下さい)	
[kwedo]	[twedʒi]	[tʃwɔjo]	
(12) 뭐야 (何か)	쥐새끼 (こねずみ)	의리 (義理)	
[mwɔja]	[tʃwiseʔki]	[uiri]	
c. 第3類型 (濃音表示の字型)			
(13) 까치 (かささぎ)	가짜 (にせもの)	마사지 (マッサージ)	
[ʔkatʃi]	[kaʔʃa]	[maʔsadʃi]	
(14) 뿌리 (根)	따오기 (鵝)	예쁘다 (きれいだ)	
[ʔpuri]	[ʔaogi]	[jeʔpuɔda]	
d. 第4類型 (初声+中声+終声の字型)			
(15) 학교 (学校)	한잔 (一杯)	놀다 (遊ぶ)	
[hakʲkjo]	[handʒan]	[nolda]	
(16) 옷장 (衣装ダンス)	멋쟁이 (しゃれ者)	밑둥 (株木の下部)	
[oʔtʃaŋ]	[moʔtʃeŋi]	[miʔtuŋ]	
(17) 말타기 (乗馬)	봄 (春)	겨울 (冬)	
[maltʰagi]	[pom]	[kjoʊl]	
(18) 춤춘다 (舞っている)		답 (答え)	
[tʰumtʰunda]		[tap]	
e. 上記の語字形に助詞のついた文章型			
(19) 여러분은 희망에 넘치는 젊은이입니다. [jɔrɔbunun huimane nɔmtʰinun tʃɔlmuniimnida] みなさんは希望にあふれる若者です。			
(20) 훌륭히 공부해서 우리나라의 기둥이 되어 주세요. [hulljunghi konbuhesɔ urinarawi kidunji tweo tʃusejo] りっぱに勉強してわが国の柱になって下さい。			

D. 日常会話の体得と活用

大学の外国語指導は、教材や進度の関係、あるいは教室の事情や受講者数などの関係でともすれば読解中心に偏りやすく、会話の習熟、練習の機会が少なくなりがちである。特に朝鮮語の場合、全体カリキュラムにおいて占める時間比率も少ないので、読解や文法指導に比べ、会話指導の時間を充分確保するのが難しいのが実情である。他の外国語と同じように、朝鮮語の会話力の習熟に必須なのが「継続」と「体験」である。少ない学習配当時間のどこで、どのような内容をどのような方法によって指導を継続的に実施していくかについて、細心の緻密な配慮と計画が必要である。特に「導入始期」における朝鮮語会話指導においては、会話項目の精選と適切な体験指導の実施が重要である。

1. 会話項目の精選

会話項目は、日常生活で最も体験頻度の高い場面を想定し、そこで行われる通常の典型的なやりとりを選ぶことが必要である。限られた時間（3週間で6時限（90分））でもあるので、実用性の高い会話文を選択すべきである。宿題として自学自習することも含め、100項目程度をこなすことが望ましい。

a. 会話場面の想定

「導入始期」で指導対象となる会話の場面として通常考えられるのは、

- (1) あいさつ、(2) 自己紹介、(3) 道案内、(4) 登下校、出退勤、(5) 買い物、
- (6) 学校生活、(7) 食堂・レストラン、(8) 国内外旅行、(9) ホテル・旅館、
- (10) スポーツ、

等である。

b. 会話文の選定

「導入始期」での会話は次のような特徴を持つものが望ましい。

- (1) 短くて発音しやすい、(2) おぼえやすい、(3) 可能なかぎり「応答」をセットにしたもの、(4) 単純な単文、等で100文程度を選び印刷配布する。¹⁰⁾

例文；①안녕하십니까? ②어서 오세요. ③감사합니다.-천만에요.

④안녕히 가세요.-안녕히 계세요.

2. 会話指導の実践

上で述べたように会話指導は「継続」と「体験」が必要であるが、

- a. 毎時間の導入段階と学習整理の段階で5分程度ずつ行う
- b. ある場面を想定し、そこで役割演技（ロールプレイング）を行う
- c. 韓国人留学生等を招き対話に参加してもらう。

等の方策が有効と考えられる。

E. 朝鮮語の「総体的感覚」の修練

朝鮮語の「総体的感覚」体得の基本は、正しく美しい様々なジャンルの朝鮮語に常に全身で接

し、言葉のトーンや発音の特色、たとえば開音節からなる日本語と異なる韓国の閉音節（받침）の特色など対比実感させることによって、言語や発音の特色を感じ取ることである。講義の中でも、次のような試みが考えられる。

1. ラジオやテレビの録音を聞く
2. 韓国の歌謡曲や民謡を聞く
3. 詩や小説の朗読を聞く
4. 韓国からの留学生や旅行者に会って話を聞く
5. 韓国の小、中、高校の国語教科書を読む

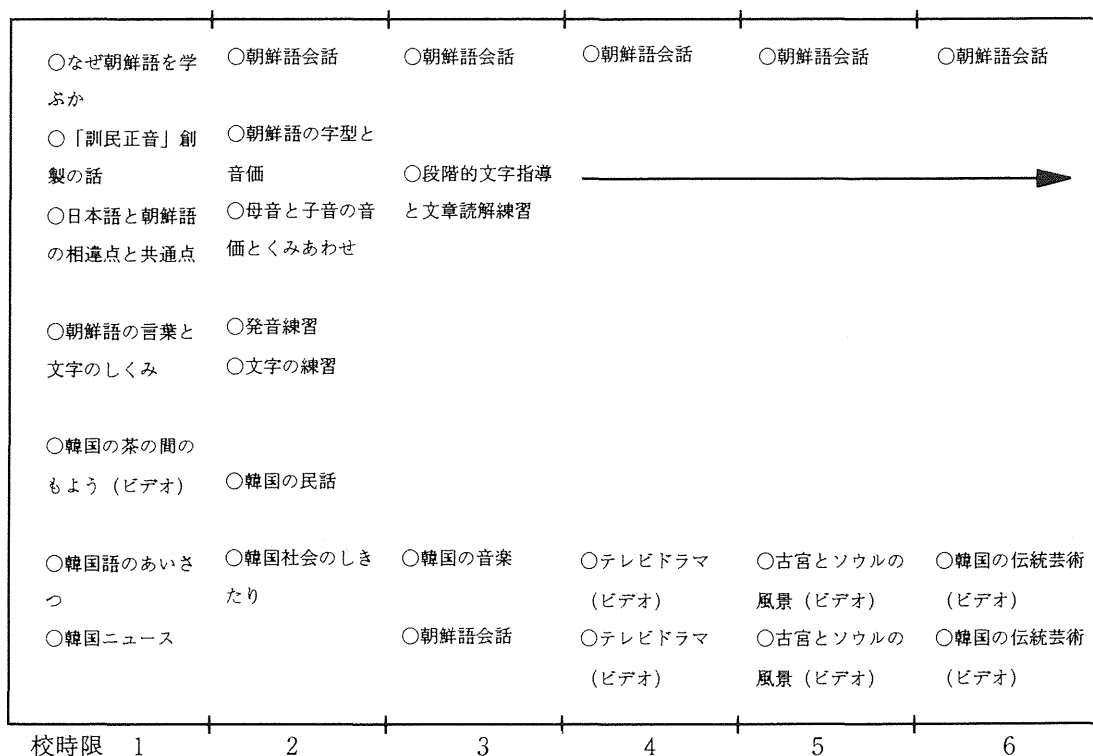
等である。

ともかく、このような「総体的感覚」の開発や定義は、長い期間にわたって可能なことであるが、継続的な積み重ねと一人一人による「実感」体験が必要であるだけに、長い目と配慮が求められる。

F. 朝鮮語「導入始期」の教授過程

以上、大学における朝鮮語学習の入門期指導の入門期初期段階である「導入始期」での指導指針や指導方法について考察した。次の図は朝鮮語初級科目における「導入始期」を、90分を単位とする1校時の6校時分としてとらえ、その典型的な速成プログラムを想定したものである。

図1. 朝鮮語学習「導入始期」の学習過程概観



おわりに

本稿では日本の大学における朝鮮語教育論を開発・展開するにあたって、入門指導期の初段階である「導入始期」における指導のあり方を課題として取り上げ、効果があったと思われる実践の体験や成果に根づく指導指標や技法を提起したものである。朝鮮語にかかわる従来の研究は、日韓を問わず、朝鮮語の構造や語法の言語学的解明に偏り、朝鮮語の教育に関する理論や実践の研究は未だ不毛のままである。

ただ、大学における朝鮮語教育にかかわる研究は特に日本の立地からすると、単なる外国語学教育論に終わるものではない。欧米語が主流をなす大学の外国語教育の陣構えの中で朝鮮語教育を定置・拡充させるためには、教育経営学的発想の転換が必要となる。

したがって、これからの朝鮮語教育研究は、なぜ朝鮮語教育が行われなければならないかの政策指向的研究や比較文化論的研究、国際教育論的研究などと相まつの照映をも受けつつ、その間口を広げ奥行きを深くしていくべきであろう。そして何よりもこの問題は、その底辺において学校教育や学校経営のあり方の問題につながっていることを直視すべきである。

注

1. 島利雄・金貞淑、日本の大学における朝鮮語教育に関する実態調査、筑波大学プロジェクト研究、1979
2. Ortrun Zuber-Skerrit, Action Research in Higher Education, Kogan Page, 1992, pp.62~65
3. 朴勇俊、日本人の朝鮮語学習における入門期指導について、朝鮮語教育研究第1号、近畿大学研究所、1987年3月、pp. 62~76
4. _____、日本人の朝鮮語学習における「促進」および「干渉」について、朝鮮語教育研究第3号、1989年3月、pp. 109~116
5. _____、前掲論文（注3）、p. 62
6. _____、同上論文、pp. 55~59
7. _____、同上論文、pp. 65~76
8. _____、同上論文、pp. 62~63
9. 東海大学教養学部国際学科の 코리아 語 I、II と麗澤大学外国語学部韓国語 I、II における筆者の実践記録にもとづく。
10. 朴聖雨・金貞淑、韓国語学習の完成、同文書院、1985年4月、pp. 4~5
11. 朴勇俊、前掲論文（注3）、pp. 77~82